

2020.1のブログ：「善の研究と $\alpha = \omega$ 」

(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index2.html#2001> ) の別紙

## 「善の研究と $\alpha = \omega$ 」

中所 武司

■NHKの「100分で名著：善の研究」第4回（録画）の中で、以下の表現が目にとまった。

『絶対矛盾的自己同一』

『異なるものが異なるままで一つになること』

『過去と未来との矛盾的自己同一的現在』

その理由は、大学院学生の時に考案した表記【 $A \neq \Omega$   $\alpha = \omega$ 】を連想したためである。この表記は、その時期のガリ版刷りの名刺の左肩にも使用している。

→【修士2年の時の名刺】(<http://www.1968start.com/M/bio/meishi.html> )

一方、私の修士論文「思考過程の数学的表現と模擬実験」(1971.3)の参考文献に「善の研究」を記載しているが、本文での引用はなく、何を参考にしたかは不明である。

→【17. 西田幾多郎：善の研究、岩波書店、1950（原1911）】

( <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm> )

そこで、今回、【 $A \neq \Omega$   $\alpha = \omega$ 】の考案には善の研究の読書が関係したかもしれないという仮説を立てて、NHKの番組「100分で名著：善の研究」のテキストを読んでみた。

なお、この表記は以下のホームページで説明している

→【 $\{A \neq \Omega \mid \alpha = \omega\}$  とは？】

(<http://www.1968start.com/M/takeshi/index-alphaomega.html>)

さらに、拙著「ソフトウェア危機とプログラミングパラダイム」で引用：

→【あとがき (p.236)】(<http://www.1968start.com/M/keigaku/sp22.pdf>)

本書の第1、2、3篇の最初の頁で背景として使用：

→【ニーチェの言葉 (p.1, p.41, p.199)】

(<http://www.1968start.com/M/takeshi/index-niet.html>)

## ■以上のブログ内容の詳細：考察

(お断り) 本文は、西田哲学と【 $A \neq \Omega$   $\alpha = \omega$ 】の類似性を述べるものではない。

善の研究の解説の中でちょっと気になった表現にコメントするだけのもの。

以下、『』の部分は、NHKの「100分で名著：善の研究」のテキストからの引用。引用ページのカッコ内はテキストの該当部分の小見出し。

→印の部分は、私の勝手な解釈。

▼ p.13 (飢えた心を癒した哲学)

『人間の心の不思議、心の謎とは何か。これが西田の根本的な「問い」であり、この心の不思議をまざまざと経験することが西田にとっての哲学の「目的」だったのです』

→私の場合、人間の思考過程の不思議に興味を抱き、その思考過程をモデル化することが修士論文の研究の目的だった。

▼ p.19 (「認知」と「認識」の違い)

『哲学にとってもう一つ大切なことは、「情意」だともいう。「情」は、私たちの「こころ」のはたらきです。情意とは、容易に言語化されない「おもい」だと考えてよいと思います』

→私の思考モデルでは、非言語レベルで思考が繰り返され、十分に概念化されたものだけが言語化関数を通して外部に出力される。

▼ p.20 (「認知」と「認識」の違い)

『ここで西田が強調しているのは、人が、同じことを認知しながら、個々別々の世界を認識し、生きているということです』

→私の用いてきた表現では、「事実は一つつだが、真実は人の数だけある」となる。

▼ p.24 (『善の研究』を読む態度)

『真の意味での読書とは、言葉という船に乗って、「問い」という海を旅することです』

→私の用いてきた表現では、「論文は、著者と議論しながら読む」となる。

▼ p.83~85 (「純粹経験」とは何か)

『「純粹経験」こそが「善の研究」の基盤になっている』

『「純粹経験」と「直接経験」は同義であり、

それは「自己の意識状態を直下に経験」することである。』

『「純粹経験」とは、どこまでも対象「を」深く見つめ、直接的に認識することです』

→私の提案する思考モデルでは、研究対象としての自分の思考過程を、研究主体としての自分が観察することによって構築したので、純粹経験といえる？

▼ p.117 (最終論文 - 真の「自己」に出会う)

以下は、<西田哲学の鍵語「絶対矛盾的自己同一」>というコラムからの引用：

(注) このコラムは、1911 発刊の「善の研究」とは別の晩年の論文からの引用

『絶対に矛盾するものが、不可分な形で一つになっているありよう、  
これが「絶対矛盾的自己同一」です』

『人間の生死を問題とすると、この矛盾的関係を越えた過去・現在・未来が一つになる  
「絶対矛盾的自己同一」の世界、「唯一なる世界」を経験する』

→今回の考察の発端は、この「絶対矛盾的自己同一」の説明が、私の【 $A \neq \Omega$   $\alpha = \omega$ 】を  
連想させたためであるが、私が学生時代に読んだ「善の研究」の中で論じられたものでは  
ないので、“他人の空似”ということになる。(^^;;

しかしながら、拙著「ソフトウェア危機とプログラミングパラダイム」(1992年)の  
あとがきで述べている次の5項目の【 $A \neq \Omega$   $\alpha = \omega$ 】の解釈の中で、2番目と3番目は  
表面的には近そうに見えるが、どうであろうか。

「建前はいろいろあるが、本音は一つである。」

「表面上は違って見えることも、中身は同じである。」

「物事には初めと終わりがあるように見えるが、実は何もない。」

「種々のパラダイムは異なるように見えるが、本質は同じである。」

「すべてのパラダイムは統一される、または、マルチパラダイム化される。」

以上